２０２５．２．９（日）使徒２１：３７～４０

21:37　兵営の中に連れ込まれようとしたとき、パウロが千人隊長に「少しお話ししてもよいでしょうか」と尋ねた。すると千人隊長は、「おまえはギリシア語を知っているのか。
21:38　では、おまえは、近ごろ暴動を起こして、四千人の暗殺者を荒野に連れて行った、あのエジプト人ではないのか」と言った。
21:39　パウロは答えた。「私はキリキアのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした町の市民です。お願いです。この人たちに話をさせてください。」
21:40　千人隊長が許したので、パウロは階段の上に立ち、静かにするよう民衆を手で制した。そして、すっかり静かになったとき、ヘブル語で次のように語りかけた。

＜説教＞

主イエス・キリストを信じようとせず、パウロに反対する〈アジアから来たユダヤ人たち〉は、パウロがエルサレムの神殿にいるのを見て、パウロが律法に逆らい、神殿を汚していると言って群衆を扇動したので町中が大騒ぎになりました。扇動された人々はパウロに殺到し、彼を神殿の外に引きずり出して殺そうとしました。こうしてエルサレム中が混乱状態に陥ったのでした(21:27-31)。そのままではパウロは本当に殺されてしまったでしょう。しかし、当時エルサレムの治安維持に当たっていたローマ軍の千人隊長が、部下の兵士たち、百人隊長たちを率いてその場に駆けつけたので、ようやく群衆はパウロを打つのをやめました(32)。千人隊長は取り敢えず〈パウロを捕らえ、日本の鎖で縛るように〉兵士たちに〈命じ〉、ユダヤ人たちに〈パウロが何者なのか、何をしたのかと尋ね〉ました(33)。しかし群衆がそれぞれ違ったことを叫び続けていたので、騒がしくて確かなことが分からなかった千人隊長はパウロをアントニア要塞の兵営に連れて行くように命じました(34)。群衆はなおも「殺してしまえ」と叫びながらついて来たので、その暴行を避けるために兵士たちはパウロを担ぎ上げなければなりませんでした(35-36)。こうしてパウロが信頼する主イエスは、千人隊長をご自分のしもべとしてお用いになり、パウロを殺そうとするユダヤ人たちの企みをここでも阻止なさいました。パウロがローマまで行くこと、それが主の御意思だったからです。なお、そのために主はこの後も続けて千人隊長や百人隊長を、更にローマ総督といった権力者たちをお用いになって行かれます。

さてそんな中で、群衆に捕らえられ、彼らから殺されようして打たれ、そして助かったとはいえ今度は二本の鎖で縛られ、兵士たちに担ぎ上げられたパウロはどうしていたでしょう。主イエスにお任せし、苦しみを耐え忍んでいたであろうことは先主日にも考えました。群衆たちは混乱状態（パニック）に陥っていたのに、パウロはパニックに陥ることなく、落ち着いていました。ちゃんと耳を澄ませて聞き、状況を把握していました。パウロは千人隊長に〈ギリシア語〉で尋ねました(37)。先に千人隊長が兵士たちに命じ、またユダヤ人たちに尋ね(33)、また兵士たちに命じた(34)ときにギリシア語を使っていたのをパウロはちゃんと聞いていました。

千人隊長はパウロがギリシア語を知っていることに驚きつつ、問い質（ただ）し　ました(38)。実はこのときの〈近ごろ〉（と言っても数年前）に、ある〈エジプト人〉が預言者と自称してローマ帝国に反逆して〈暴動を起こし〉、しかし〈総督フェリクス〉(23:24)

によって撃破され、〈四千人の暗殺者を荒野に連れて行〉き、自分は姿を眩（くら）ました、という事件がありました。その〈エジプト人〉がいつか再び現れるかもしれないと千人隊長は普段から警戒していて、今回のパウロがそれかもしれないと疑ったのでしょう。

そこでパウロは答えました(39)。自分は〈キリキアのタルソ出身のユダヤ人〉であり、〈れっきとした〉（歴然とした、はっきりとした）〈町の市民〉であると落ち着いて、毅然（きぜん）とした態度で語りました。と共に、「お願いです。この人たちに話をさせてください」と謙遜に、丁寧に語りました。それで千人隊長の警戒、誤解も解けました。

パウロの願いどおりに、そして間違いなくここでも聖霊がお働きになったためだと思いますが、千人隊長はパウロの言うことを聞いて、許可を与えました(40)。〈二本の鎖〉も解かれたことでしょう。パウロは階段（〈兵営〉と神殿の間にあったのでしょう）の上に立ち、静かにするよう民衆を手で制しました。そして民衆がすっかり静かになるのを待ち、確認してから、今度は民衆に理解できるように〈ヘブル語〉で彼らに語りかけました。パウロが千人隊長とギリシア語で話しているときも、周りでは民衆が「殺してしまえ」と叫び続けていました。千人隊長も（彼の仕事、任務とはいえ）、パウロがもし〈あのエジプト人〉だったとしたら、懐に短剣を隠し持ていて、いつ自分や兵士たちに向かって来るかもしれないと警戒しながらのことだったかもしれません。そんな混乱状態の中でパウロはどっしりと落ち着いて、平安であり、冷静に考え、語ることができました。

それは彼が主イエスとそのみことばに立ち、聖霊が共に働いてくださっていたからです。主イエスは使徒たちに言われました。「人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです」と（ルカ 12:11−12。他ルカ 21:14−15、マタイ 10:19−20、マルコ 13:11）。もちろんパウロはペテロなど他の使徒たちからこのイエスのみことばを伝え聞いていました。パウロはこのイエスのみことばを心に刻んでいました。そしてここでも思い起こしたに違いありません。このときパウロは民衆の言葉、千人隊長の言葉を肉の耳を澄まして聞きつつ、同時にイエスのみことばを信仰の耳を澄まして聞いていたのです。このとき語るべきことは何かを教えようとしておられた聖霊が語ってくださることを信仰の耳を澄まして聞いていたのです。そして主イエスのみことばを、聖霊が語ってくださることを聞き取り、信じました。それで民衆の「殺してしまえ」の大合唱と混乱状態の中でも、打たれ殺されそうな危険の中でも、また権力者の疑いの目の中でもパウロは慌（あわ）てず、怖じ気付くことなく、大胆に、落ち着いて、平安でいることができました。権力者である千人隊長にも語りかけることができました。

そのようにしてパウロはまだ殺されることにはならず、いのちが守られました。しかしパウロが一番願い、目指していたことは（既に学んだように）神がほめたたえられること、主の御名が崇められること、主イエス・キリストが証しされ、主イエスの福音が宣べ伝えられることでした。なぜなら、主イエスが人々から「殺してしまえ」と言われつつ、むち打たれ、パウロの罪をその身に負われてパウロのために十字架で死んでくださったからです。そして復活なさり、パウロの罪を赦し、死んでも生きる永遠のいのちを与え、パウロをご自分の証人として召してくださったからです。この主イエスの名のためなら死ぬことも覚悟していたパウロは、自分に殺到し、手をかけ、捕らえ、殺そうとしている人たちに主イエスの話をさせてくれるように、千人隊長に〈お願い〉しました。もちろん何よりも

神に願い祈りつつそうしたのです。

「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」（Ⅱテモテ 3:12）とパウロは言いました。今の時代も、この世にあって、真実に、誠実に、本当に、徹底的に主イエスに聞き従い、主イエスを証して生きようとするなら同じことになります。そんな中で慌てることなく、落ち着いて、平安に生きるためには、何よりも信仰の耳を澄まして主のみことばと聖霊の語りかけを聞き、主のみこころを正しく知り、信じ従うことが必要です。そして肉の耳も澄ましてこの世の状況、現実をも正しく知ることが必要です。私たちのために十字架で死なれ、復活、昇天され、みことばと聖霊によって世の終わりまでいつもともにいてくださる主イエス・キリストを信じ、キリストのための苦しみを受けつつ、平安で落ち着いた生活を送る私たちであるよう、乞い願い祈ります。